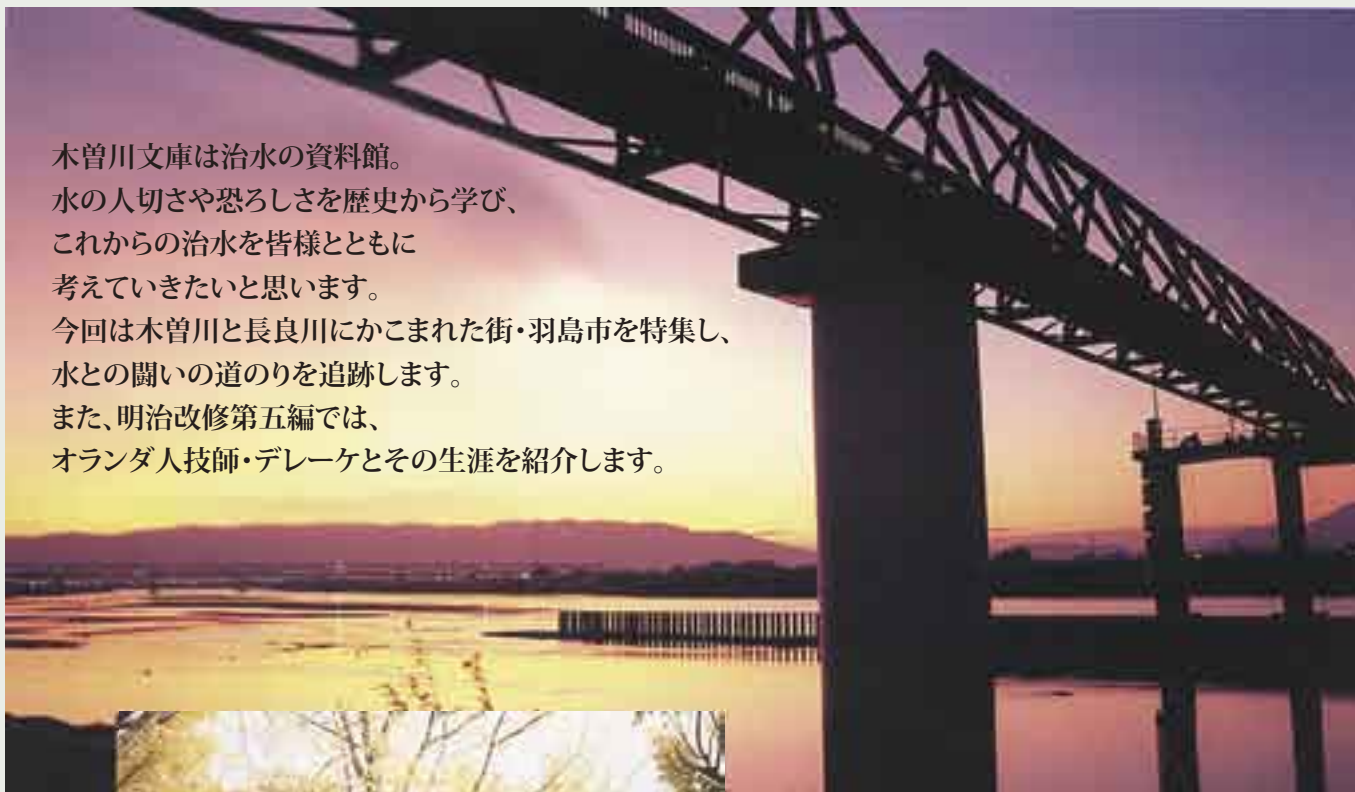


木曽川

木曽川文庫は治水の資料館。
水の人切さや恐ろしさを歴史から学び、
これからの治水を皆様とともに
考えていきたいと思います。
今回は木曽川と長良川にかこまれた街・羽島市を特集し、
水との闘いの道のりを追跡します。
また、明治改修第五編では、
オランダ人技師・デレーケとその生涯を紹介します。



INDEX

ふるさとの街・探訪記《羽島市》

◆変貌する岐阜県の表玄関

AREA REPORT

◆逆川400年の歴史とその治水事業

気ままにJOURNEY

◆昔日の風景を探して旅のシネマは始まる。

歴史ドキュメント

◆デレーケとその生涯

TALK&TALK

◆波瀾万丈の生涯をおくったヨハネス・デレーケの素顔
／三宅雅子氏

民話の小箱

◆かき上げ堤と半兵衛

岐阜県の表玄関・羽島市

北東に雪をいただいた御嶽、西に養老山脈を眺望する羽島市は、かつての輪中地帯。乱流する河川とともにその歴史を重ねてきました。しかしながら水場という地理的悪条件は、美濃編と呼ばれる特産品を生み出す要因に。近年、新幹線岐阜羽島駅や名神高速道路の岐阜羽島I.C.など、交通ネットワークの充実に伴い、情報アクセスも整備され、現在では「活力に富んだ国際文化情報都市」を目指して、多彩なプロジェクトが計画されています。



羽島市空撮



羽島市のあらしと古代



近世の郡界／羽島市史より

岐阜県の南西部に位置する羽島市は、木曾川と長良川の合流地点から北へV字型に囲まれた沖積平野です。東は木曾川を挟んで愛知県尾西市や中島郡などに、北は境川を隔てて羽島郡に、西は長良川が安八・海津両郡との郡境をなし、海拔は5m前後の平坦地帯。中央には逆川が北上する人口六万五千人の岐阜県の中核都市です。そもそも羽島市はかつての輪中地帯。木曾川や長良川をはじめ数多くの派川が網の目のように駆けめぐる低湿地でした。大河がおこす氾濫は肥沃な土壌を育てましたが、その反面、度重なる洪水や水場という地理的な悪条件に悩まされながら、人々は粘り強い努力を払い、集落を形成し歴史を重ねてきました。しかしながら多発する水害は、その歴史的な痕跡さえ押し流してしまい、羽島市には古代遺跡が、見あたりません。人々は



桑原の救命壇

による桑原排水事業では、輪中内の村々を上・中・下の三組に分割し、水量に応じた水路を開削し枳樋を各組毎に築造。両工事とも歴史に残る難事業となりました。しかしこれらの事業は洪水の抜本策とはならず、このため多くの集落は輪中堤に沿うように家建て、また堤防から離れた集落では、共同避難所として高台を築いたところもありました。小熊町や桑原町の助命壇は、当時の名残りをとどめています。

美濃編の生産

この地方の織物の歴史は古く、大和朝廷の頃。水害常習地帯であったこともあり、水に強い桑が植えられ養蚕や機織りが盛んになったと伝えられています。その後、十五世紀になると絹織物は主産業に。尾張八丈や美濃あしきぬの名で知られるようになります。

ところが今から四百年前のこと。コンロン人（中国の西南方高原の民族）が尾張国に流れ着き、綿の種を美濃国守護土岐氏に献上すると、この地方の織物の歴史が一変します。水場という地域性は、桑と同様綿の成育にも適していたでしょう。その後、竹ヶ鼻付近は綿の生産地となり、綿木綿も織られるようになりました。これが美濃編のはじまりです。

こうした綿織物は江戸時代になると飛躍的に発展し、棧留編や菅大臣編、結城編など様々な製品が出荷されるようになりました。

河川が運ぶ土砂が堆積した小高い自然堤防洲に住んでいたと推定されています。大化二年（六四六）、大化改新の詔が発令され大和朝廷率いる律令国家体制が構築されるようになると、羽島市北部は尾張国葉栗郡、南部は同国中島郡という行政区画に組み入れられ、その所在地は次の通り。葉栗郡―葉栗郷（竹ヶ鼻・小熊・福寿・足近）中島郡―石作郷（正木・駒塚・江吉良・堀津・上中・下中・八神・小藪）現在の美濃地域に位置する羽島市が尾張国に属していたのは、本市の北境を西流する境川が、かつては木曾川の本流で、その名のごとく美濃・尾張の境をなしていたため。近世、美濃国に編入されるまで、長い間尾張国に属していたと考えられています。

東西の勢力を分かつ境川

律令制国家の崩壊、荘園の勃興、そして武家勢力の台頭など、時代の変遷に連れてこの地方は数多くの覇権争いの舞台となりました。

というのも、当時の河川は重要な交通の要衝。とりわけ境川は東西を分かつだけに、政変が勃発するとおびただしい血が流されました。それに加え、境川沿いに鎌倉街道が走っていたことも、戦乱の火の手に拍車をかけたことに。この街道は鎌倉幕府が樹立された中世、全国各地から鎌倉へ向かう道として整備されたものですが、中でも京都から美濃・尾張を経由し鎌倉へ向かった鎌倉街道は代表的な存在。羽島市域には、小熊宿・足近宿が置かれ、現在の小熊町の西堤外地には、源頼朝が上洛の際泊まったと伝えられる御殿場跡も残されています。

こうした地理的環境から、当地方は様々な戦乱に巻き込まれることに。源頼朝が挙兵した治承の乱（一一八〇年）では、墨俣川（現在の長良川）河畔の西小熊一乗寺付近が主戦場。源氏後退後は東小熊や直道付近が第二の戦場となった模様で、一乗寺の南を俗に地獄谷と称し、以前

鉄道開通と近代化の波

明治時代になると中央集権をめざして廃藩置県が実施され、それに伴って明治二二年、竹ヶ鼻町に町制が施行されました。これを皮切りに明治三〇年には羽栗郡の一部と中島郡とが合併して羽島郡が誕生。この際、ほとんどの大字の村が合併し、市制施行前の旧村が生まれました。その後、町村合併促進法に基づき、羽島郡の南部の十ヶ町村が昭和一九年に合併し、岐阜県下九番目の都市として羽島市が誕生。昨年は市制四〇周年を迎えています。

羽島市の成長は鉄道をはじめとする交通機関の発展や橋梁の架設と切っても切り離せないもの。大正十年、羽島市を縦断する竹ヶ鼻鉄道（現在の名鉄竹鼻線）の開業を皮切りに、昭和九年には直営バスも運行。同十八年には名古屋鉄道と併合し輸送力が強化され、昭和三五年には岐阜市への直通電車が開通。木曾川には濃尾大橋、馬飼大橋、尾濃大橋が、長良川には南濃大橋、羽島大橋、大数大橋が架設され、交通網も一段と充実しています。また、昭和三九年に東海道新幹線岐阜羽島駅が、昭和五八年に名神高速道路岐阜羽島I.C.が設置されると、羽島市は名実ともに岐阜県の表玄関に。こうした立地条件から物流・情報関連企業の進出が著しく、その産業構成も第三次産業の占める割合が急速に伸びています。

現在は「活力に富んだ国際文化情報都市」をめざして「はしまりバーフロント開発構想」や「逆川等河川修景事業」など、多彩なプロジェクトが計画されています。



昭和20年代の名鉄竹鼻線・西竹鼻線（現在の羽島市役所前駅）

は刀や鎧などが発掘されたこともあり、漆黒の真夜中に阿鼻叫喚の戦いを物語る壮烈な叫びが風に乘って聞こえてきたとの伝説が今もって残されています。後鳥羽上皇らが鎌倉幕府打倒の兵を挙げた承久の乱（一二三二年）には、尾張河かつての木曾川本流境川の呼称が戦場となり、尾張河の浅瀬には俗称九瀬の渡し「大井戸」（可児市）鵜沼（各務原市）板橋（各務原市）気瀬（岐南町）摩免戸（各務原市）稗島（岐南町）食（岐南町）洲保（墨俣町）市脇（羽島市）といわれた上皇方の防備陣がしかれました。しかしながら、朝廷側は大敗を帰し、後鳥羽上皇は隠岐に流されています。

風雲つずく下克上

覇権をめざす大名が群雄割拠する戦国時代。その中でも、美濃の斉藤道三、尾張の織田信長、三河の徳川家康、駿河の今川義元などが美濃国で激しい戦乱を繰り返しており、この地方を舞台にした合戦も数多く行われています。

織田信長が本能寺で横死し、覇権争いが深刻化した天正十二年（一五八四）、織田信雄の配下にあつた竹ヶ鼻城と加賀野井城（現在の羽島市下中町）は、羽柴秀吉に攻められて落城し、八神（現在の羽島市桑原町）城は秀吉側に加担して城主毛利氏は領土を安堵。中でも竹ヶ鼻城の水攻めは、秀吉三大水攻のひとつ。一か月に及ぶ長期作戦により、秀吉は勝利をおさめています。



竹鼻城の趾

- 参考文献
- 『羽島市史』第一巻／第三巻羽島市発行
- 『岐阜県地名事典』角川書店発行
- 『羽島市／市勢要覧』
- 『羽島市発行』
- 『南濃羽島市』
- 『羽島市社会科研究部編』
- 『羽島市の歴史と史跡ガイドブック』
- 羽島市観光協会発行

●円空上人誕生の地●

全国を遊行し特異な木彫仏を数多く残した円空は、寛永九年（一六三二）、中島郡中村（現在の羽島市上中町中）の生まれ。幼名は宗哲。洪水で非業の最期を遂げた母の供養のために出家。亡き母のために生涯十二万体の仏像を彫ることを決意し、全国を行脚する放浪の旅に出かけました。

荒々しさの中にも素朴さと優しさを秘めた円空仏。この仏像こそ円空の信仰深さを物語る生き証人。中でも三八歳の折り、故郷で彫りあげた観音堂の本尊、十一面観音像はその代表的なもの。後に母神像とも呼ばれ、母への想いを痛いほど伝えています。

数々の仏像を残した円空の享年は六四歳。即身仏として入定することを決め、関市池尻にある自分の弥勒寺に帰り、穀絶ち水絶ちの厳しい千日修業をした後、元禄八年（一六九五）七月十五日、放浪の生涯を閉じました。



円空の十一面観音像

ふるさとの町・探訪記

逆川四百年の歴史とその治水事業

羽島市の中央を北西に流れる逆川は、天正の洪水で生まれ落ちた木曽川水系の異端児。今や下水路と化したこの川も、かつては木曽川と長良川をつなぐ大河。豊富な水量は舟運の発展を支える一方、恐ろしい水害を引き起こしていました。宝暦治水、木曽三川下流改修など、逆川の歴史は、また治水事業の道のり。こうした教訓を生かし、現在では多彩な事業が進められています。



逆川の平成/パーク

◆木曽川本流を変更させた天正の洪水

逆川は木曽川水系の異端児。木曽川水系の河川が伊勢湾をめざして南へ流れるのに対し、北西へ流れるという特異な逆川が、今から約四百年前、天正の洪水によって誕生しました。

天正十四年（一五八六）の大洪水は、美濃の前渡村（各務原市）と尾張の草井村（江南市）の間を木曽川本川の激流が西へ向かって村々を貫き、笠松村、田代村の辺りより南に折れて南西に貫流。ほぼ現在の河道を形成しました。それまでの木曽川は現在の境川を下り、柳津村（岐阜県柳津町）で派川足近川を分かち、西小熊（岐阜県羽島市）と墨俣（岐阜県墨俣町）の間で長良川と合流し、須脇村（岐阜県平田町）より南下、深浜村（岐阜県海津市）付近では、現在の大江川がその河道でした。

この洪水によって、現在の木曽川右岸の駒塚と加賀野井との間を新河道の激流が北西方向に流れ、逆川を分派しました。この方向が付近の地形や水流の方向と逆であるので、逆川と名づけられました。

天正の大洪水により尾張平野は大打撃を受けましたが、本格的な改修事業が行われたのは八年後の文禄三年（一五九四）のこと。豊臣秀吉の命により中島郡と海東郡の新木曽川筋の堤防が竣工しています。その後、慶長六年（一六〇二）尾張側に木曽川堤が築かれ、同十三年（一六〇八）になると巨大な御開堤が完成。小信中島村で南下する河道を堰き止め、加賀野井川を掘り広めて大きな新川とし、これを木曽川の幹流としています。従って、加賀野井・中野両村は木曽川を隔てて東西両岸に分離されることとなり、これらの村は美濃と尾張に二分されることになりました。

その一方、木曽川の各派川は締め切られることとなり、木曽川の幹流であった境川は前渡村で水脈を絶ち、各務村より発する一小川となり長良川の支川へ変更、足近川も同様、ただの悪水路の小流となり、下流は竹ヶ鼻村辺りで逆川に合流しています。このように前代未聞の大洪水は、尾張や美濃国の地形図を塗り替え、御開堤の築



天生14年の洪水によって消滅（移動）した村（水野時二原図）/木曽川町史より

り、毎年供養の行事が行われています。殖産興業を急ぐ明治時代に入ると、木曽三川の完全分流をめざした木曽三川下流改修が明治二〇年より着工されました。

この工事の一環として逆川の改修が着手されたのは明治二五年のこと。逆川は堤防によつて長良川から締め切れ、樋門が設けられました。これにより、長良川からの逆流は解決しましたが、ひとたび大雨が降れば樋門が閉じられ、逆川一帯の停滞水も排出できなくなるなど、なおも問題を残すことになりました。

これらの問題を解決すべく行われたのが大正十四年に開始された木曽川上流改修工事。昭和三年から長良川堤防治いの福寿町間島に新しい樋門と逆川排水機場が建設され、併せて毎秒二・三七mの排水能力を持つ排水機が四台設置されました。

その後、排水ポンプを増設するなど排水能力も強化され、逆川は静かな悪水路となりました。

その一方羽島市では、日照りが続くとかばつの害にも悩まされていた。このため、まず北部を対象に昭和七年、木曽川から取水する羽島用水が完成しました。

また、中部や南部を対象としては、長良川から水を取り入れる桑原用水が昭和三二年に完成しています。



福寿町間島の逆川排水機場



桑原町小藪にある排水機群

◆逆川等河川修景事業

逆川は整備されるにつれて、その河川敷は急速に市街地化しました。現在の昭和町、東町、共栄町、栄町など、竹鼻の市街地一帯はこうしてできた町並みです。

しかしながら、近年の都市化の波に伴って、河川は徐々に汚濁し大きな課題ともなりました。

特に逆川は市街地中央を流れる典型的な都市河川のため、生活排水や工場排水により汚れた川となっていました。



桑原排水機場の排水ポンプ

このため、羽島市は逆川等河川修景事業を計画し、市民と行政が一体となって水質浄化を図るとともに、護岸等の修景を整備して市民の憩いのスペース創りを進めています。また、川沿いには桜や梅を植えて散歩道を設けるほか、ミニパークや水と遊べる空間も整備し、潤いのある町づくりをめざしています。

一方、名神高速道路高架下の逆川畔（駒塚・加賀野井の両地点）には遊水地区を設け、万一の水害に備えて水量調節を図るスペースとしています。

天正の洪水で産み落とされた逆川四百年の歴史は、そのまま羽島市の歴史。この限らない自然の恩恵と水害の教訓を生かしながら、羽島市の河川整備事業は着々と進められています。

■参考文献

- 『新編宮田用水史』
- 宮田用水土地改良区発行
- 『羽島市の歴史と史跡ガイドブック』
- 羽島市観光協会発行

造による派川の締切は用水や悪水路など数多くの問題を派生させました。

◆商業の発展を支えてきた逆川のせん舟運

逆川は木曽川より分派して四kmほど北西へ流下した後、竹ヶ鼻村付近で足近川に合流、さらに下流で長良川に流入しており、こうした地形の関係から木曽川本流の水が激しく流れ込む急流で、水深も深く、度々水害を引き起こしていました。しかしその一方、舟運に利用されるなど、産業の発展にも大きな役割を果たしました。

天正の洪水以降は、川岸には川町という舟付場のある町も誕生、慶長年間（一五九六～一六一五）には竹鼻専福寺もでき、門前市も開催されることに。江戸時代になると竹ヶ鼻村で以前から開催されていた六斎市（一八〇二）も舟運の発展により、一層華やかなものになり、市では呉服物や小道具小間物、荒物、魚類、青物など、あらゆる商品が扱われるようになりました。

この時期隆盛を極めた美濃縮も、こうした舟運によることが大きかったでしょう。竹ヶ鼻の商人の中でも最も頭角を現した大沢文助は、近江商人と組んで成長し、棧置問屋に所属して、江戸積みに当たっていました。

一方、逆川の豊かな水量は染色屋の発展も促しており、今日逆川周辺に染色店が多いのは、恵まれた環境に起因しています。

◆逆川の治水事業

産業発展の原動力となった逆川ではありますが、周辺地域への度重なる水害は目を覆うほどの惨状でした。

- 『羽島市史第一巻』第三巻 羽島市発行
- 『羽島市／市勢要覧』羽島市発行
- 『市制40年のあゆみ』羽島市発行
- 『羽島のしま』平成三年八月号
- 羽島市発行

- 『木曽川町史』木曽川町発行
- 『木曽三川流域史』
- 建設省中部地方建設局発行
- 『木曾三川』その流域と河川技術』建設省中部地方建設局発行
- 『天正十四年以前の木曽川中流部の流路』安藤萬壽男著
- 愛知大学／総合郷土研究所紀要第四〇号輯

はしまりバードフロント 開発構想

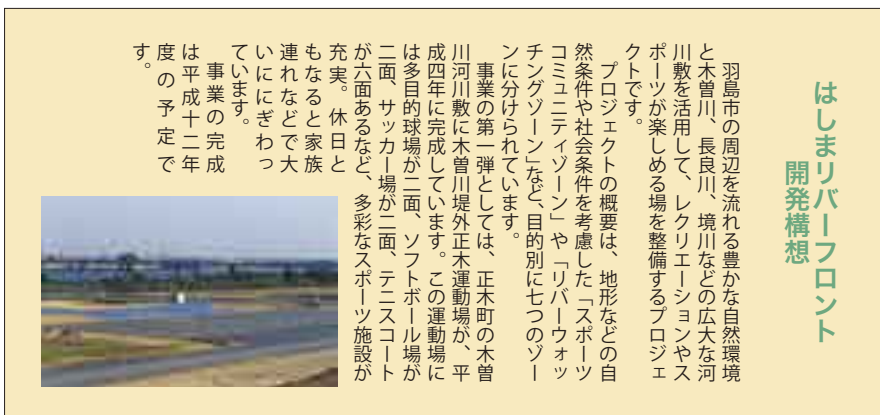
羽島市の周辺を流れる豊かな自然環境と木曽川、長良川、境川などの広大な河川敷を活用して、レクリエーションやスポーツが楽しめる場を整備するプロジェクトです。プロジェクトの概要は、地形などの自然条件や社会条件を考慮した「スポーツコミュニティゾーン」や「リバーウォッチングゾーン」など、目的別に七つのゾーンに分けられています。事業の第一弾としては、正木町の木曽川河川敷に木曽川堤外正木運動場が、平成四年に完成しています。この運動場には多目的球場が二面、ソフトボール場が二面、サッカー場が二面、テニスコートが六面あるなど、多彩なスポーツ施設が充実。休日ともなると家族連れなどで大いににぎわっています。事業の完成は平成十二年度の予定です。



竹中伝六之墓（竹鼻別院）



薩摩義士之墓（清江寺）



◆ 平方勢獅子 ◆
10月10日：平方八幡神社境内

八幡神社の祭礼に奉納されるこの「平方勢獅子」は天下泰平、五穀豊穰を祈願する神事。江戸時代初期に福寿町平方の永照寺六世等乗が村人に呼びかけたのが始まりという。その後元禄年間（1688～1704）に歌舞伎の勢獅子を取り入れ今日に至っています。演目は弊の舞、勢獅子、遊猿の舞、狐釣りなど多彩。この神楽獅子の底流には、伊勢系神楽の古い型が伝わっているといわれています



羽 島 市 行 事

- 藤まつり……………4月23日～5月5日：竹鼻別院境内
- 竹鼻まつり山車曳行…… 5月3日(雨天の場合4日)：八剱神社、竹鼻町一帯
- 代々まつり…………… 7月1日・15日：竹鼻町一帯
- 大賀ハスまつり…………… 7月15日～8月16日：羽島温泉一帯
- 三世代ふれあい広場…………… 7月下旬：羽島市民会館一帯
- 七夕まつり…………… 7月下旬：竹鼻商店街
- 花火大会…………… 8月14日：木曾川畔
- 円空大祭…………… 8月18日：中観音堂
- なまずまつり…………… 10月下旬：竹鼻商店街
- 花と緑のまつり…………… 11月上旬：羽島市民会館一帯
- お砂踏み…………… 1月元旦～5日：開白寺分院
- 火渡り…………… 2月3日：開白寺
- お粥付(粥占い)…………… 2月下旬(旧暦正月15日)：大須徳林寺ほか
- 椿まつり…………… 3月上旬～中旬：市民の森羽島公園ほか
- 桜まつり…………… 3月下旬～4月上旬：市民の森羽島公園ほか



- 公共交通機関利用●
JR／名古屋駅→岐阜羽島駅 15分
名鉄／新岐阜駅→笠松駅→新羽島駅 25分
- マイカー利用●
名古屋I.C.→→→名神高速道路42.6km→→→岐阜羽島I.C. 30分

気ままにJOURNEY

南無阿弥陀仏
この歌が寺のある足近町直道の語源という説も。なるほど、悟りの道を開かれただけあって、歌にも親鸞上人の深遠が込められているのでしょう。



西方寺

とほしったとか。この本尊が「流血の阿弥陀如来」といわれ、今なお創痕を残した秘仏とされています。しかしながらこの阿弥陀如来、その作風から見て鎌倉時代中期の作品、聖徳太子の如来とはおそらく別物というのが通説です。とはいえ、こうした出来事を伝えよう、残そう、という人々の切なる思いが「流血の阿弥陀如来」伝説を生み出したのでしょう。流血の伝説を知って争いの痛ましさを知る、あるいは敬虔な信仰心を知る。ひよつとしたら伝説は、昔日の人々の声なき声なのかもしれません。

●三七松の伝説●
戦争といえはもうひとつ、秀吉の竹ヶ鼻城水攻めにまつわる悲しい伝説も残されています。時に天正十二年（一五八四）のこと。織田信長の死後、政権樹立をめざした羽柴秀吉は信長の息子信雄が所領する竹ヶ鼻城をめぐって合戦をはじめました。しか

し、当時の竹ヶ鼻城は深くて広い堀を幾重にもめぐらし、攻め込む道がありません。思案にくれた秀吉は豊かな水をたたえた堀に視線を向けました。水、水、堀の水。じつと考え込んだ秀吉は、ハタと気づきました。「そうだ、この水を利用するのだ」早速秀吉は城の周囲に高くて長い堤防を築き、足近川の水を引き入れました。しかも季節は梅雨。雨で量を増した水は勢いよく流れ込み、みるみる海のように広がっていききました。こうなると竹ヶ鼻城は水に浮く城。湖上に似た籠城の日が続き、戦は長期戦へと持ち込まれました。この戦は秀吉三大水攻めのひとつといわれるもので、結局秀吉が圧勝しましたが、悲劇の伝説はここから生まれたもの。というのも、竹ヶ鼻城主の夫人はその付近の石田郷を治める毛利氏（のちの豊臣）の娘。竹ヶ鼻城主は義父に援軍を求めますが、秀吉を恐れた毛利氏はなしのつぶて。これを怒った竹ヶ鼻城主は、水の満ちる中で酒宴を張り、義父毛利氏をのしつた後、夫人に離縁状を叩き

付けました。城を追い出された夫人は泣く泣く家来の三七を伴い郷里の近くまで来る。 「もうここから先はお父上の領地、一旦嫁いだ私が、何ゆえおめおめ帰ることができません。夫の武運よ永久に。わが子達よ、いつまでも健やかに幸多かれ」というと、稲妻の光る中で短刀で首を一突き。野の露と消えました。供の三七も夫人の亡骸を葬ると、墓印に一本の稚松を植え、自害して果てました。この稚松はその後三七の松と呼ばれ、今も夫人の高節の態度や家来の三七の忠義を物言わず語り継いでいます。

しかし残念ながら悲劇の伝説、水に浮かぶ竹ヶ鼻城はすでになく、その痕跡を残す碑は市道の傍らにひっそりと。雑草の中にその身を隠してしまっただけです。世にいつれ、消えゆく数多くの物語。そんな人々の声なき声に耳を傾ければ、今という時代がきつと、見えてくるのかもしれません。

遠く養老山脈に
日が沈むころ釣り舟の
シルエットが
茜色の夕日と戯れるようにひとつ
釣り糸を垂れている川べりのスキは
白い穂を風になびかせて
行き交う時を見つめている。
旅のシネマは、
今、昔日の風景を
浮かびあがらせる

昔日の風景を探して、
旅のシネマは始まる

教科書にも登場した美濃の聖人。私財を投じてに石橋や道標などを作った人物です。



竹鼻小学校の佐吉翁石像

「遠州灘は古来より船の難所だと聞いております。今までも多くの船が遭難してきたことでしょう。今、私の大仏様が海底に沈んだら大変嬉しいこと。これからは大仏様が大きい船人をご加護してくださいませ。」

昔から船を守護するのはサイコロか十二文銭と相場は決まったもの。こんな大仏様なら、さぞご利益もあらたかなことでしょう。次いで注文した大仏が、現在大仏寺に安置されている佐吉仏で、高さ四・九mの青銅造りの釈迦座像です。

しかし、佐吉の善行はこればかりではあ

この報告を聞いた佐吉は、

「遠州灘は古来より船の難所だと聞いております。今までも多くの船が遭難してきたことでしょう。今、私の大仏様が海底に沈んだら大変嬉しいこと。これからは大仏様が大きい船人をご加護してくださいませ。」

昔から船を守護するのはサイコロか十二文銭と相場は決まったもの。こんな大仏様なら、さぞご利益もあらたかなことでしょう。次いで注文した大仏が、現在大仏寺に安置されている佐吉仏で、高さ四・九mの青銅造りの釈迦座像です。

しかし、佐吉の善行はこればかりではあ

（七〇二）、竹鼻の商家の息子としてこの世に生を受けました。どうやら、産みの母は佐吉幼少の折りにすでになく、継母の手で育てられました。仏の佐吉を形づくったのはこの継母の信心深さによるもの。そのエピソードはこうです。

ある時、継母の代参として東国、西国の霊場を巡拝していた佐吉は、出羽の宿で死に直面する大病を患ってしまいました。二度母親に逢つてから死にたい。今一度親孝行をしてから死にたい。病の床でそう願った佐吉は、一心に神仏に祈りを捧げました。するとまもなく、不思議なことに佐吉の病は快方に向かったのだとか。無事竹鼻に戻った佐吉がこのことを継母に話すと「仏様のご利益です。四恩報謝のために大仏様でも建立されたいかがでしょう」確かにこのころの佐吉は、綿を扱い店を構える商人。十二歳で紙間屋に奉公し、竹鼻に帰つてからは、敬虔な信仰心実直さで、商いは順調に伸びていったようです。だからといって、大仏建立は大金を要すること。一介の商人には荷は重過ぎるというえましよう。しかし、そんなことにひるむ佐吉ではありません。迷わず遠い江戸まで大仏を発注し、やつてきた大仏は船で運ばれました。しかし、海路の難所遠州灘まで来た時に、強風を受け船は沈没。大仏は海の藻くずと消えました。

りません。暮らしに困っている人があれば、それを助け、道や橋が悪くて不自由していると聞けば、私財を投じて直し、道標を建てる。しかしながら彼が作ったという橋や道標に銘は記されていません。が、それも彼の謙虚さからくるもの。大仏寺の脇には、佐吉建立による美濃三地藏のひとつと呼ばれる地藏尊が今も安置されています。

●流血の阿弥陀如来●

郷土の偉人を生み出した羽島ですが、こんな心温まる話ばかりではありません。なぜならこの辺りは、度々合戦の舞台になったところ。恐ろしい伝説がいくつも残されています。

さてそんな伝説を求めて羽島市役所前駅から名鉄竹鼻線へ。電車に揺られることわずか数分、南宿駅で降り西へ三百m歩くと、お目当て西方寺が見えてきます。

そもそもここは、推古天皇二十年（六二〇）聖徳太子が山背大兄皇子の安産祈願のために創建、当初三尊院太子寺と称された由緒あるお寺です。本尊は太子自ら彫ったといわれる阿弥陀如来像。しかしながら、時代の流れとは異なりしきもの。この寺は天台宗に改宗された後、親鸞に帰依して浄土真宗に。親鸞は改宗当時の僧祐善に別れを惜しんでこんな歌を贈っています。

「都へはもう足近き直ぐ道の国への土産は



境川の水鳥

●美濃の聖人、永田佐吉翁●

岐阜羽島駅から北へ歩くことおよそ七百m。市民会館を右へ折れると、佐吉仏と称される大仏寺が見えてきます。戦後世代が総人口の半数を越えてしまった今、「昔の教科書に乗っていた人」なうんてお話は通用しないでしょうが、実はこの佐吉さん、あの二宮尊徳と並んで戦前の国定



佐吉仏

デレーケとその生涯

砂防の大切さを説き、
木曾三川下流改修を計画指導した
オランダ人技師ヨハネス・デレーケ。
三十年に及ぶ滞在生活の中で、
河川改修、築港、砂防事業を精力的に計画しながらも、
次々と襲いかかる家族の悲劇…。
そんな逆境の中で近代日本の土木事業に貢献した
デレーケとその生涯。
波乱に満ちた生きざまを紹介します。

船頭平河川公園のブロンズ像



デレーケのブロンズ像

木曾川と長良川を結ぶ船頭平閘門。この閘門に接する河川公園にひとつのブロンズ像が建っています。この像は多くの市民の募金により建立されたもので、除幕式は木曾三川下流改修から百年を経た昭和六十二年十月九日。三川分流の偉業とそれを成し遂げた人々を称えて盛大に開催されました。

片手にステッキをもちシルクハットをかぶった小柄なオランダ人。このブロンズ像の人物こそ、日本の開明期、河川改修にその生涯を傾けたヨハネス・デレーケです。明治六年に来日以來、約三〇年に渡って日本に滞在し、木曾三川下流改修をはじめ淀川、利根川の河川改修や築港工事な

オランダ人技師の招聘

デレーケらオランダ人技師の来日は、明治政府の要請によるもの。明治の指導者は新政府発足後、すぐさま欧米諸国の技術者、専門家の力を借りて新しい国家建設に乗り出したのでした。

しかしながら、当時のオランダはその主流から除かれていました。二百年を越える長い鎖国期間、徳川幕府は長崎の出島を通じてオランダだけから、世界の文明、文物、情報を取り入れていたにも関わらず、そうして得た学問から、もはやオランダよりも英仏などの方が遙かに屈強であることを、明治政府はすでに認識していたからでした。

こうした情勢下でただひとつ、土木技術の分野にはオランダ人技師が登用されました。その理由はオランダの大部分の国土が海面下であり、長い歳月を経て干拓したという実績によるもの。河川、港湾、浚渫技術の伝統は卓越しているとの見解に基づいたためでした。

しかし、当時の実力者木戸孝允はオランダと日本の河川の相違を指摘し、オランダ人技師登用に疑問を投じています。こうした批判を浴びながら、結局政府は、オランダ人技師の招聘を決定し、技師長

悲劇が襲い いかかる滞在生活

オランダ人技師団の中で最も滞在生活が長いのは、ヨハネス・デレーケの三〇年。リンドウは明治八年、チッセンは九年、親友エッセルも明治十一年に帰国し、ムルデルは一旦十二年に、技師長のドールンは翌十三年に帰国しています。同僚や上司が次々と帰国する中で、一人滞在を続けるデレーケ。これにはやはり学歴という問題が立ちはだかつていたようです。というのも、当時のオランダが稀にみる不況。まして学歴優先社会の中では、いくら技術力が優れているとはいえ、デレーケのような低学歴者は恵まれたポストを期待できません。

続々と帰国する技師団を見送りながら、仕事に打ち込むデレーケ。しかし明治十二年秋、最初の不幸が訪れます。義妹のエルシェがコレラで死亡。また二年後には妻ヨハンナが死亡、三二歳の若さでした。結婚以來十三年、ことに来日以来の八年はともに過ごす時間も少なく、それだけにデレーケの無念を忍ぶことも容易です。しかも育ち盛りの子供を残しての死…。

デレーケは木曾三川下流改修計画を終えた明治十八年、一旦帰国し二五歳のマリアと再婚しています。そして再び来日の帰途、またも悲劇が襲います。息子のエリアザル死亡の知らせです。わずか九歳、家庭の暖かさを味わうことも少ないまま、異郷で寂しく世を去ったわが子の死を、デレーケはどのような受け止めていたのでしょうか。

しかし、デレーケには悲嘆にくれている



デレーケとエッセル

ドールンをはじめエッセル、ムルデル、リンドウ、チッセン、デレーケら六人の技師、ウエストルウィル、カリス、アルンスト、マイトレクトら四人の粗朶工、石工などの工手が来日しています。

オランダ人技師六人の中には階層があり、ドールンが長工師で、エッセルとムルデルが一等工師、リンドウが二等工師、チッセンが三等工師、デレーケは最下等の四等工師でした。これはデレーケの学歴によるもので、他の技師が大学卒業というエリートであったのに対し、デレーケは現場で技術力を養ったいわば叩き上げの技師。しかしあえてオランダの名誉回復を背負った技師団に選ばれるには、やはりそれだけの理由があったのでしょうか。卓越したデレーケの技術力。それはどうやら彼の生い立ちに起因しているようです。

デレーケの生い立ち

一八四二年十二月五日、デレーケはオランダ最南部のゼーラント州の田舎町コリンスブライトで生まれました。父ピーター、母アンナの間には三男四女があつて、デレーケはその次男。父も祖父も築堤工、土木請負業で、彼のその後の人生はこうした家庭環境の中で決定されたといえます。いわゆる水面下という自然環境も無縁ではありません。少年時代からデレーケはよく家業を手伝っていたようで、一八六五年、二歳の折りに運河会社に就職し、湾の



デレーケの生家

暇も余裕ありません。

エリアザルが死んだ年、木曾三川は大洪水に見舞われていたのです。

妻の死、息子の死を悲しむ余裕さえ与えられなかったデレーケですが、その実績は明治政府から評価されるようになっていました。

広域にわたった偉業



木曾三川分流碑

木曾三川下流改修計画の立案、大阪、三国、広島等の各港の調査、淀川、常願寺及び富山県と石川県の河川の改修計画、淀川水系の砂防計画など、デレーケの業績は広域に渡っています。中でも熱心にその必要性を説いたのは砂防事業、「一川を治めるものは山を治めるべし」。激動の幕末維新の中で無残に伐採された禿け山を洪水の原因とみていたのです。

こうした実績は明治政府からも評価され再契約時の月給は四五〇円。明治二二年には勳四等瑞宝章、翌年には勅命官へ昇進、二五年には勳三等瑞宝章が贈られ、月給も五百円となりました。

そしてついに明治三六年、いよいよ日本を去る日が近づいてきました。「わが役目終われり」。

急激な成長を遂げた日本はすでに欧米諸国の技術力を体得していたのでしよう。帰国間近のデレーケは外務省大臣小村寿太郎の建言により勳二等瑞宝章を受賞しています。帰国後のデレーケは中国に渡り揚子江の航路改良工事に従事した後、大正二年祖国の阿姆斯デルダムで没しています。享年七〇歳。その人柄は粗野なれど実直、技術者としては完全主義者で情熱家だったといわれています。

締切工事などに携わっていたようです。こうしてデレーケは土木技術を天職とするようになりますが、専門知識はオランダの建設省技官レブレット（後のデルフト工科大学教授）から学び、仕事を通じて理論と技術を磨いていったようです。

家族と過ごした二ヶ月の船旅

デレーケがエッセル、アルンストとともに日本へ向かつて旅立ったのは明治六年八月のこと。デレーケとその妻、義妹、二人の子供、エッセル、アルンストが乗った船は、フランスのマルセーユ港を出発、ナポリ、スエズ、運河などを経て長崎に入港しています。この船旅は2ヶ月にも及びましたが、その後の多忙な生活を考えると、この期間だけが家族とともに穏やかに過ごせた日々。デレーケにとって大切な思い出の家族旅行となりました。

そして同年の九月、デレーケらは長崎に入港します。この時デレーケ三二歳、エッセル



デレーケの家族

■参考文献

- 『木曾三川の治水史を語る』建設省木曾川上流工事事務所発行
- 『昭和五十九年度／木曾・長良背割堤環境調査業務・報告書』建設省木曾川下流工事事務所発行
- 『木曾・長良背割堤ハンドブック』建設省木曾川下流工事事務所発行
- 『木曾三川流域誌』建設省中部地方建設局発行
- 『木曾三川そのく流域と河川技術』建設省中部地方建設局発行
- 『デレーケとその業績』建設省木曾川下流工事事務所発行
- 『デレーケの生涯』中日新聞連載
- 『デレーケ伝(その1)』文明開化の日本へ近代土木技術を移転したデレーケとエッセルら』工学博士上林好之著

明治改修のあらし

明治政府は西欧の近代技術を導入し、抜本的な改修、すなわち完全な三川分流計画を策定し、蘭人技師ヨハネス・デレーケのもと、明治20年に着工しています。その目的は①洪水防壁②堤内の排水改良③舟運路の改善であり、そのうち①と②が重点課題。高水工法を主体に第一期から第四期にかけて工事は行われ、明治45年には完成、三川分流を実現しています。



波瀾万丈の生涯をおくった ヨハネス・デレーケの素顔

三宅雅子氏

デレーケの人物 第二回

三〇年もの長きにわたって日本に滞在し、日本の近代土木事業に情熱を燃やしたオランダ人技師ヨハネス・デレーケ。その波乱に満ちた生涯を、中部ペンクラブの副会長・三宅雅子氏に語って頂きました。

「玉屋」は大垣藩の上級武士で格式が高く、宿屋になつてからも上客しか泊めなかつたと聞いていたが、デレーケは政府の大切なお雇い技師である。優遇されていた様子がよくわかる。筆者はその他に、玉屋に入りしていた元芸妓さん数人に取材し、玉屋の様子を聞いた。だが彼女達は九〇歳代なので、もう十年早ければ、まだ生きていた人達も居ただろうからへもつと様子が聞けたのにと残念な思いがする。

その「玉屋」の孫のおかみに会つたばかりなのに、今度はデレーケの孫に出会い、一〇〇年



デレーケの孫たち(左:デレーケ、中:筆者、右:マリア)

おかみに会つのも苦労した。今こそ「玉屋」はすぐにわかるが、当時は推測でしかなかった。

筆者が会えたときはおかみは七〇歳代だが、昔のことは幼くてほとんど覚えていない。初代のおじいさんが、「二階に大切な外人さんが泊まつていて、日本語で料理の注文を受けたが、その作り方がわからなくて難儀した」と語っていたと言う。「玉屋」には、東郷平八郎も泊まつていたのですよ」と、三代目のおかみは誇らしげに筆者に語った。垂井の小学校に時代の英雄・東郷平八郎揮毫の額が残っているので、その話はうなずける。



デレーケの巨石塚堤

◆機縁◆

筆者がデレーケの孫たちに始めて出会つたのは、平成四年（一九九二）十月四日、木曽川公園で催された「第二回レガッタ・デレーケ杯」に来日されたときである。

J・H・デレーケさんと、マリア・デレーケさんの兄妹は、筆者が前夜祭で、彼らの祖先であるヨハネス・デレーケの講演をしたと知り、多大な興味を持って接してこられた。デレーケ物語である『乱流』を書くため、取材に何回かオランダを訪ねたが、その頃はまだお孫さん達の所在はわかっていなかった。昭和六二年に木曽三川公園が出来たとき、新聞社が探し当てたのである。

一〇〇余年前、デレーケが設計・プランをし、大工事が行われた長良川の川辺に立ち、三人で記念写真をとったとき、決して明治改修は夢物語りでも遠い話でもなく、今再びそのときの技術者の血を流している者たちが木曽三川の前に立っている。実際に筆者は圧倒されていたのである。

丁度その半年前、筆者はようやく「玉屋」のおかみを探し当てていた。デレーケが大垣に駐在して、三川分流の設計図やプランを書くため宿にしていた「玉屋」を突きとめるのも長い月日がかかったが、

三宅雅子氏のプロフィール

作家・日本ペンクラブ会員・中部ペンクラブ副会長・「長良文学」主宰。第七回日本文芸大賞女流文学賞・岐阜県芸術文化奨励賞・受賞。

デレーケを書いた『乱流』で、土木学会出版文化賞・中部ペンクラブ文学賞特別賞・日本河川協会功労賞・第五回大垣市ストピア章を受賞。

●『乱流』は岐阜新聞に掲載・平成七年八月CBC四五周年記念スペシャルドラマになり全国に放映された。



経つた今、筆者を結び目として、関係者たちの糸を川を通じて感じていたのである。それから一年後、筆者は、「木曽川文庫」で今度はデレーケと一緒に仕事をしたエッセルの孫であるハンス・エッシャーに会えた。機縁とはこういう事を言うのか。



エッセルの孫と筆者(木曽川文庫玄関前)

◆デレーケの仕事振り◆

デレーケの人物像の評価は、伝えられるところによると、現場監督上りなので、粗野で服装も構わず良く歩く。勤勉であるが強情である。計画等よく変更し日本人技師とトラブルを起こしていた、日本に来てから勉強した等々である。

はたしてそうであらうか。

一緒に来日し仕事を共にしていたエッセルが、大阪からオランダの母に出した、明治八年（一八七五）一〇月四日付けの手紙が、デレーケの仕事振りや人柄を良く伝えている。

『…前略…デレーケと一緒に働けるこの好機に、彼から沢山のことを学びたいのです。今日までの半生をこの道一本に生きてきた彼の技術は筋金入りです。彼の実施に即応した工学知識は、折あるごとに現場の技師に問い質して、さらに独力で修得した成果です。鋭敏な知性、好感を



オランエ閘門(デレーケが来日前に働いていた)

呼ぶ態度、天賦の観察力、かなり優れた記憶力、考え方も話し方も、そして文章を書くまでも、独創的で核心を衝いています。彼の仕事は素早い上に、渾身を打ち込むので、当然ながら抜群の効果を収めます。エンジニアの学位を取得している者の中でも、彼ほどの人物に会つたことはありません。しかし彼の来日を促したファン・ドールンを含めて誰もがデレーケを僕がするようによく評価しているわけではありません。高等教育を受けた技師の多くが公平な見方をしないのです。彼らは自分と同じように特権階級的教育を受けた者を優先偏好し、そうでない者に対しては公平にふるまわないのです。…中略…平等精神と有用性の観点からも、僕はデルフト王立アカデミー出身の技師たちよりも、デレーケのような人材を高く買っています。勿論僕はデレーケと働くことによって対局させられる不愉快な一面を否定しません。僕は彼が自分の劣等を肯定する態度にたびたび応接させられています。しかし、このような不満も彼との親交がもたらしてくれる恩恵に比べたら、取るに足らないものです。オランダでデレーケのような立派な師匠に出会える事はまずあり得

ないでしょう』

とまでエッセルは言っている。この手紙は、高等教育を受けていない現場監督上がりのデレーケの立場をよく現している。そして更にエッセルは筆を進めて、

『工事熟練者の協力なしに、日本の現場で勉強しその練習を通して、やがて任せられる工事を捌いていけるだろうと仮定した僕は実に軽率な愚か者でした。日本ではあまり厳格に追及されないであろう、やむを得ない場合は少しぐらいごまかしても、気づかれないだろうと予想していたのです。しかし現実はそのいけません。ここでは日本人だけではなく、外国人にケチをつけるのが何より好きな英国人が隙を狙っているのです。デレーケが僕の傍らにいてくれることは幸運中の幸運といえましょう。僕の方こそ彼にふさわしい協力者であつて、今後の施工に彼の技術に頼らなければならぬ点が多くなると思います。

デレーケの技術面における眼識の鋭さに驚かれます。普通ならば細部にわたって説明すべき工程について、彼はそれを省いても間違いない工事を進捗させてくれるという手腕を備えています。その上彼は僕と同じように、完全に理解出来るまでは決してわかつたと言わない懷疑的な性格の持主です。これは貴重な長所です。このような事情にもかかわらず、デレーケの月給が少なすぎることを悲しく思います。少なくとも僕と同額であるべきです。日本への貢献度は、僕のそれよりも断然上回っているのですから『フオス美弥子訳』有史以来、誰も成し遂げることの出来なかつた木曽三川分流を、みごとに設計・プランをしたデレーケは、確かに日本への貢献度は高いと言って良い。エッセルは六年一緒に仕事をし、オランダへ帰国した。水政省に復帰し、後年は最高位の技監にまで登りつめた。

デレーケとは生涯を通じての友人となつたのである。

(つづく)

BOOK LAND

現代歌集シリーズ48

星揺光

■著者 三宅雅子
■発行所 六法出版社



「ここに短歌には一切の説明が許されない。そのきびしさに振り回されながらそれでも私らしい歌を詠みたい。いつの日か、心に響く歌が、一首でも表現できたら本望である」

小説家であり、歌人でもある作者はあとがきでこう語っている。

太陽の哄笑。百万本のひまわりの咲く畑。七色の虹の立つ湿原、水沼。星揺光とは何か、ミューズに歌い問いかける珠玉の短歌集。

五七・五七七、三十一文字に凝縮されたその想いは、限りなく広がりをもって読者にかたかりかけてくる。

民話の小箱

かき上げ堤と半兵衛どん

羽島市

むかし、むかしのこと。

かつてないほどの大雨が幾日も幾日も続き、

ついに木曾川の流れも変えてしまうほどの洪水が美濃の村々を襲った。

この大水の後、羽島市竹ヶ鼻の東にできたのが逆川。

木曾川と長良川を結ぶこの川は、水量が多く、

雨が降る度に水があふれだし、川岸の正木輪中の百姓たちは、

ほとほと困り果てていたそう。

「雨が降らねば米はとれぬが、

こう大水が続けば、わしらいずれは干上がってしまう」

そこで百姓衆は手を取り合って堤防を築き、

洪水の危険に備えるようになったとか。

ところが、正木輪中の加納新田（現在の羽島市正木町）の堤防を築こうとした時、

上流の足近輪中の百姓衆の猛反対を受けたという。

ここに堤防を築かれると足近輪中に水が停滞して下流へ流れなくなるからである。

しかし逆に正木輪中の百姓衆は、毎年洪水で苦勞ばかりしていたから。

洪水を防ぐためにはどうしても堤防を築かねばならぬ。

お互い、命をかけての水争い！

ついに、手に手に竹槍をもつての争いにまで発展してしまったそう。

この時、目覚ましい活躍をしたのが正木輪中に住む半兵衛どん。

半兵衛どんは天狗に剣術を習ったという剣の達人で、

竹槍一本で、足近輪中の百姓衆の竹槍を全部取り上げてしまったという。

正木輪中の百姓衆は、この戦いの間に一生懸命に土をかき上げ、かき上げ、

ついに堤防を築くことに成功したそう。

それからというもの、この辺りの堤防をかき上げ堤と呼ぶようになったとか。

正木輪中には、この他にも天狗にまつわる話が、

数多く残されているという。



●木曾川文庫利用案内●



《開館時間》 午前9時～午後4時30分
《休館日》 毎週月曜日・祝祭日・年末年始
《入館料》 無料
《交通機関》 国道1号線尾張大橋から車で約10分
 名神羽島ICから車で約30分
 東名阪長島ICから車で約10分
《お問い合わせ》
 船頭平閘門管理所・
 木曾川文庫
 〒496 愛知県海部郡
 立田村福原
 TEL(0567)24-6233



＝編集後記＝

台風シーズンも終わり、いよいよ行楽の秋。とはいえ、今夏の猛暑の影響で、昨年に引き続いての水不足に悩む地域もあるのだとか。

水は貴重な天然資源。大切に無駄のないように使いたいものですね。

編集部では皆様のご意見、ご感想をお待ちしています。宛て先は、木曾川文庫まで。

Vol.16 編集にあたっては、羽島市役所、三宅雅子先生にご協力をいただきました。ありがとうございます。次回は岐阜県八百津町を特集します。ご期待ください。

●表紙写真●

上：夕焼けの長良川 中：一乗寺参道 下：石田の猿尾

『KISSO』Vol.16 平成7年10月発行

発行：建設省中部地方建設局木曾川下流工事事務所 〒511三重県桑名市播磨81

制作：財団法人河川環境管理財団 〒450愛知県名古屋市中村区名駅四丁目3番10号(東海ビル)

TEL(0594)24-5715

TEL(052)565-1976